

## ソシユールとユング

## ——交霊会の波紋——

戸田 功

舌語りという現象がある。これはエクスターゼ、特に宗教的エクスターゼ中に何やら訳の分らぬことをひとりで語り出す現象である。語る人がそれまでに知らなかった言葉、例えばギリシャ語、ラテン語などで話すこともある。舌語りはエクスターゼ状態にある人間の異常な能力昂進の一つであり、昔から人々の興味を惹いて来た。ヨーロッパでは19世紀の半ばまで、この現象は何か神的な現象として考えられていた。その後、実証主義精神の台頭によってこの現象の病的側面が強調され、今度は反対にこの現象と関わるものが何か恥しいことであるかのように考えられるようになった。どちらも、エクスターゼ状態にある人間の異様で圧倒的な印象が、それらの態度に微妙な影響を及ぼしていると考えることができる。いずれにせよ、その現象は、人々、特に人間の言語や心理に関心を持つ者にとって、何事かを考えさせずにはおかない力を持っている。

19世紀末、ジュネーヴの心理学者達の間で、エレヌ・スミス（仮名）という若い女性の霊媒が関心の的になっていた。ジュネーヴ大学の心理学教授、テオドール・フルールノアは、1894年から彼女についての研究に携わり、1900年、『インドから火星へ』<sup>1)</sup>という題名の一冊の厚い本を出版した。彼女は疑いなく平凡な一女性であったが、エクスターゼ状態で透視能力を持ち、特異な人格を示していた。ある時は彼女は10世紀も前のインドの一女性であり、またある時彼女は火星を訪れていた。フルールノアは、彼女がエクスターゼ状態で話す二つの言語を聞き書きしている。一つは火星語、そしてもう一つはヒンドゥ語、またはサンスクリット語もどきである。フルールノアのヒンドゥ諸語についての知識は限られたものであったので、彼はジュネーヴ大学の同僚であり、高名な言語学者であるフェルディナン・ド・ソシユールに助けを求めた。1895年から1898年にかけてのことである。<sup>2)</sup>

ソシユールは彼女のエクスターゼ状態の観察に立ち会い、細心の注意を払ってその発した言葉に注釈をつけている。例えば、その一般的特徴についてソシユールは次のように述べる。

「彼女が話す言語が実証的にいって〈サンスクリット語〉であるかという問いには、もちろん〈否〉と答えねばならない。いえるのはただ次のことである。1. これはさまざまなシラブルのごたまでであるが、その中に8シラブルから10シラブルまでの意味をもった文の断片が現われることは疑いない。2. 上述のシラブル以外は理解不可能のものだが、サンスクリット語の性格には反していない。つまり、サンスクリット語の単語の一般的形態に反したり対立したりするような形はとっていないのである。」<sup>3)</sup>

また、彼は、例えば次のような矛盾も指摘している。

「もっとも驚くべきことは、シマンディーニ嬢〔これが、スミス嬢がインドに生まれかわって

いるときの名前である]がプラクリ語ではなくサンスクリット語を話すことである〔インド諸国では女性はサンスクリット語ではなくプラクリ語を話す〕…。ところでシマンディーニの話す言語は、それと認めることがはなはだ難しいサンスクリット語であるかもしれないとは考えられても、プラクリ語では絶対でない。<sup>4)</sup>」

さらにソシュールは、サンスクリット語を知らない読者のために、当時のヨーロッパでは良く知られていたラテン語を使って、ラテン語もどきのテキストを作っている。つまり、シマンディーニのサンスクリット語とブラフマンのサンスクリット語の関係が、このラテン語もどきとティトゥス=リトゥス、あるいはキケロのラテン語の関係になるようにするのである。そして、そのラテン語もどきとその注釈の後で、ソシュールは次のように結論する。

「2つの重要な結論がある。1. 問題のテキストは<二つの言語>を交えて作られたものではない。テキスト中に現われる単語は、ラテン語の単語ではないとはいえ、そこに第三の言語、たとえばギリシア語、ロシア語、あるいは英語が介入してくるようなことはない(……)。2. またそのテキストの価値は、<ラテン語の性格に反するなにもものをも提示しないこと>に存する。テキスト中に現われる語が、意味をまったくもたず、なにもものにも対応しない個所においてすら、そうなのである。それでは、ラテン語を離れ、スミス嬢のサンスクリット語に話を戻そう。彼女の話すサンスクリット語は、<子音 f を全然>含まない。これは消極的な形ではあるが、考慮に値する事実である。実際< f >の音は、サンスクリット語には無縁なのである。ところで、もし出まかせなやりかたでサンスクリット語の単語をこしらえようとしたなら、< f >の音をもった語を作り出す可能性は、そうではない場合の20倍もあるだろう。もしサンスクリット語に< f >の音がないという事実を知らなければ、この子音の使用は、他の子音の使用と同様に正当なものと思えるだろうか。<sup>5)</sup>」

ソシュールは、スミス嬢の語る「ヒンドゥ語」にかなり熱中したらしく、上記フルールノアの著書中、ヒンドゥ語を扱った章の半分は、ソシュールがフルールノアにあてて書いた手紙の抜粋からなっているほどである。ソシュールのこの熱中ぶりは、彼の学問的沈黙が1894年を境に始まっていると考えると、非常に興味深いものがある。

フルールノアの『インドから火星へ』は、同じ1900年に出たフロイトの『夢判断』とともに、当時バーゼル大学の医学部学生であったC. G. ユングに決定的な影響を与えた。フルールノアの事例研究を読んだ若きユングは、身近にあった同じような現象の事例研究を発表する決心をした。「いわゆるオカルト現象の心理と病理<sup>6)</sup>」と題されたこの論文は、精神科医となったユングの最初の論文であり、彼の学位論文となったものである。後年、彼は次のように述べる。

「フロイトにとってはすでにのべたブロイラーのケースが決定的であったように、私の見解の根底にもひとつの決定的な体験が横たわっている。私の臨床のコースで比較的長期にわたって、ひとりの少女の夢遊症のケースを観察した。このケースは私の学位論文のテーマとなった。私の学問上の仕事を知ってくれる人にとっては、40年も以前に書かれた学位論文を私の後半の考えと比較してみることは興味がなくもなからうと思う。<sup>8)</sup>」

彼は、自伝にこの経験について次のように書く。

「まさにこれは偉大な体験であり、私の若いころの哲学を徹底的に打ちのめし、私を心理学的な視点に到達させることになった。」<sup>9)</sup>

さらに晩年自分の心理学を包括的にまとめた書の序分で次のように述べる。

「…無意識の自律性という、フロイトの理論と私の理論とを原理的に区別する考え方は、すでに私がある夢遊症の少女の心の発達史を研究していた1902年に私の脳裏におぼろげながら存在していたのであった。」<sup>10)</sup>

ユングが出合った「決定的な体験」の経緯は次のようなものである。彼は、親戚の人達が15歳なかばの少女（母方いとこ）を霊媒として交霊会を催していることを聞き、誘われるままに会合に参加する。彼は、彼女が知りもしない彼等の祖父の声色を真似て語ることを不思議に思い、また、その頃彼の家でもテーブルが裂けたりパンナイフが砕けたりする不思議な現象を経験していたので、毎週土曜の夕方に行われる交霊会に定期的に加わるようになった。1899年から1900年にかけてのことである。この少女についてユングが強く印象づけられた点は、エクスターゼ中に彼女が名乗ったうちの一人イヴェネスが普通の彼女よりもはるかにすぐれた能力を示したこと、非常に思慮深いイヴェネスの人格と普通の彼女の未熟な人格との著しい対照であった。その後24歳時の彼女に会ったユングは、その人格の独立性と円熟味とに感銘している。彼女は26歳で死亡しているが、死亡する数カ月前にはその性格は少しずつ崩壊し、最後には2歳児の状態に逆もどりしていたという。ユングは、少女が名乗ったイヴェネスの人格を、無意識の内に陶冶されつつある彼女の後半の成熟した人格であると考えた。そこから、後年のユングの無意識についての見解、例えば無意識の意識に対する補償作用や、無意識の自律性の概念が由来していると考えることが<sup>11)</sup>できる。

学位論文「いわゆるオカルト現象の心理と病理」の中で、ユングは、エクスターゼ状態における精神能力の異常な増進を説明するために、「潜在記憶」という概念を用いている。この概念は、前記フルールノアが同じような現象を説明するために始めて導入したものである。フルールノアは、『インドから火星へ』の中で、ある種の霊媒現象を、無意識の中に忘れられた過去の記憶の異常な再生として説明している。この考え方がユングの霊媒現象の観察に影響を与えたと考えられる。<sup>12)</sup> 上記論文の結論部分で、ユングは次のような考察を述べている。

「上述したのとは別の可能性、つまり注意散漫な状態において、または理解不充分のため関心が半減しているとき、それ自体興味をそそらなくはない対象が受けいれられ、それが潜在記憶として再生されることは、主として夢遊症者に見られるが、また文芸の中では瀕死の人において描かれている。多様なこうした現象のなかで、主としてわれわれの考察の対象となるのは、外国語で話すこと、いわゆる舌語りの症状である。このような現象はいたるところで言及されており、いずれもそれに相応するエクスターゼの状態が問題となっている。即ち新約聖書、聖人行伝 (Acta Sanctorum)、魔女裁判に、近い時代ではプレヴォルストの女予言者に、裁判官エドモンドの娘ローラに、またこうした点についても唯一無二の仕方<sup>13)</sup>で研究されたフルールノアのエレーヌ・

スミスに、さらに牧師ブルームハルトのゴットリービン・ディトゥスと同一人物と思われるブレスラーの例にといった具合である。フルールノアが示したように、舌語りは、実際に独立した言語であるかぎり、すぐれて潜在記憶の現象なのである。この著者のきわめて興味深い詳論を参照されたい。<sup>13)</sup>」

さて、エクスターゼ状態にある人間の異状で圧倒的な印象が、ユングの場合、彼の学問的生涯を決定付けるほどの体験となったのであるが、ソシュールの場合、それはどんな意味を持っていたのであろうか。

1984年1月、ソシュールは以前から企てていた一般言語学理論構築の困難を訴える手紙を弟子であり友人でもあったフランスの言語学者A・メイエに送っている。その中でソシュールは次のように述べている。

「…〔リトアニア語〕のイントネーションに関する私の論文の始めの部分が発表されるでしょう。第二の論文でイントネーションについて私が言いたいことを終えるでしょう。…しかし、こういったことすべてに全く嫌気がさしています。ことばの事象に関してまともに意味の通ずるようなぐあいには何か書こうとするのは、ただの10行だけにしても困難なことで、その困難さにも嫌気がさします。ずいぶん前からこういった事象の論理的分類、我々がそれをとり扱ういろいろな視点の分類に関心をもっていますが、だんだんその仕事の巨大さがわかるようになってきました。その仕事とは、ひとつひとつの操作を前もって見ておいたカテゴリーに帰着させることにより、言語学者に、いったい彼が何をしているのかを示すことであります。そしてまた同時に、結局のところ言語学でなし得るところのかなり大きな空しさもわかってきました。

私にとって興味を持ち続けていられるのは、つまるところ、個々の言語の、目を楽しませるような側面しかないのです。つまりひとつの言語がこれこれの起源をもったどこかの民族に属するがゆえに他のすべての言語と異なるといえるような、ほとんど民族誌的な側面にしか心を惹かれていないのです。ところが、まさにこうした研究にも、屈託なく没頭することができなくなっているのです。

現在人々が用いている術語の馬鹿馬鹿しさ、それを改革する必要性、そのためには一般的言語とはどういう種類の対象であるか示す必要性が、絶えず私の歴史に対する喜びを損ねてしまうのです。ところが私はといえば、一般的言語にかかざらわれないで済むことほど願わしいことはないという人間なのでから皮肉なものです。

こういったことは、結局のところ私の意に反して一冊の本になるでしょう。その本の中で、感動もなく、何故言語学で用いられている術語の一つたりとも私には意味があると認められないかを説明するでしょう。正直なところ、その後になってはじめて私の仕事を、かつて放り出していたところからまた始めることができるでしょう。

たぶん馬鹿げているでしょうが、こうした精神状態にあることは事実で、具体的には何の苦勞もない論文を、発表せずにぐずぐずと1年以上も引き延ばしているのは何故か、その理由はデュヴォ〔パリ言語学会幹事〕に上のような私の心境を説明すれば分ってもらえるでしょう。それに

この論文でも、論理的に到底使えないような厭うべき表現を避けることが、どうしてもできないでいるのです。というのは、それを解決するためには徹底的で根本からの改革をせねばならなくなるからです。…」<sup>14)</sup>

彼がこの手紙の中で予告した一冊の書物は結局出版されなかったのであるが、彼の死後、その草稿の一部と考えられるノートが発見されている。1903年頃からソシュールはニーベルンゲン研究と、それに続くアナグラム研究に本格的に着手したと考えられている。では、フルールノアの依頼を受けた1895年からニーベルンゲン研究に着手するまで、1903年頃まで、ソシュールは一体何を研究していたのだろうか。

公的にはソシュールは1986年ジュネーブ大学正教授に昇任し、ギリシャ語を主とした方言学を1903年まで、「ヨーロッパ言語地理学」を1902-3年に講義していた。さらにジュネーブ歴史考古学会で1901年と1903年に地名考を発表している。そして、余暇の時間を使って方言調査に没頭するのである。40歳余のソシュールは、ノートとペンを手にレマン湖畔やジュラ山麓の村々を歩き、村人を相手に俚言の採集に励んでいたのである。当時の彼の研究スタイルを例えば1901年発表の「ローマ時代におけるオロン町の名称」<sup>15)</sup>で見ると、大体次の通りになる。

まず彼は、論争点となっている地名の古代名と現在地との対応を、あらゆる言語外的要素を考慮に入れて検討する。次にフィールドワークを始める。例えば、古代の文献に記された行程通りに、雪の峠道を徒歩で越え、所要時間と地形の実証から定説を疑い、仮説を立てる。この仮説の証明のために、文献と収集した俚言とを駆使するのである。彼は地名も言語記号の一種として、通時・共時両軸の交点に捉える。また、地名の音形をその地方全体の音韻進化の体系内で検討する。そして復元した古代名の音形を規則通り変形させて推定形を仮定し、収集した現代俚言の音韻の中にその推定形が存在することを発見する。こうして見事に仮説を証明し、論争に終止符を打ったのである。

実に卓抜な研究であるが、ソシュールはこのような研究を次々と行いながら、それらを殆ど発表しなかったのである。その理由は、先のメイエ宛の手紙にあるように、一般言語学理論の不在という難問が解決していなかったことに帰せられるだろう。では、1894年に約束した一般言語学に関する書物は、何故発表されなかったのだろうか、また、その後間もなく関係することになった舌語りという現象から、ソシュールは一体何を受け取ったのだろうか。

正確な年代は特定できないが、1890年代後半に書かれたと推定される手稿の中に、次のようなものがある。

「散歩している時に、私が気晴しのつもりで無言のまま樹木に小さな刻み目を入れるとする。すると私に付いて来た人物が、この刻み目を頭に焼きつけてしまう。その時から、彼がこの刻み目に2つか3つの観念を結びつけることは明らかである。しかるに私の方には、彼をかついでやろうとか、暇つぶしをしようかという以外には別段考えないのである。——物質的な事柄全てが既に我々には記号である。ということは、それは、連合を呼び起こす現象だということだが、しかしそれでも物質的なものは不可欠のように思われる。言語記号の唯一の特殊性は、他の何より

も正確な連合を生み出すということであり、多分そこには、契約的ソームの上<sup>17)</sup>にしか実現されない、観念連合の最も完全な形式が見られるだろう。」

ユングが無意識状態の異常な能力増進という事実にその思想的な重要性を見出し、心の重層性と無意識の自律性、完結性という彼の分析心理学の根本概念を導き出したのに対して、ソシュールの念頭にあったのは、人間の頭、または精神の中で、ことばというものがいったいどんな形で存在しているのかということであった。ことばが個々の人間の頭の中に存在しているとすれば、それはいったいどんな形で存在しているのだろうか、また、ことばが個々の人間の精神の中の現象であるとすれば、それを研究するということは、本来的に人間の精神の特性である気まぐれさによって、ことばを研究することそれ自体が無効になってしまうのではないか。エレヌ・スミスの舌語りが、「一般的言語とはどういう種類の対象であるかを示す必要性」にかられていたソシュールに、以上のような深刻な問題を提示したであろうことは容易に想像することができる。

現在我々はソシュールに由来するものとして様々な重要な概念を挙げることができる。ラング・パロール・ランガージュ、共時態・通時態、シニフィアン・シニフィエ、恣意性・必然性、差異・対立、連合関係・連辞関係、音素、体系、価値……そして未だ存在していない学問分野としての記号学の構想。それらはソシュールの意図に反して、我々の所有するところとなっている。ソシュールがその死に至るまで悩み続け、遂には自ら発表することもなかった一般言語学理論構築の試みは、その稀にみる創造力と、それ以上に厳しい学問的良心、即ち問題意識の所産として、我々の前に聳え立っている。その峻峰に挑むには、何よりもその峰の成立している基盤をよく見きわめ、登攀ルートを正しく設定することが必要になる。その成立基盤の一つに、これまで我々が見てきた舌語りという現象に由来する問題意識があるとするならば、ソシュールを理解するための有効な視点としてそれを設定することが可能であろう。それは、ユングに於けるように、必ずしもありえないことではないのである。

〔注〕

- 1) Thèodore Flournoy, Des Indes à la planète Mars, Paris-Geneve, 1900.
- 2) トドロフ著、及川、一之瀬訳『象徴の理論』法政大学出版局、1987年、423頁
- 3) 同 425頁
- 4) 同 425頁
- 5) 同 425 - 7頁
- 6) 同 424頁
- 7) C.G. Jung, Zur Psychologie und Pathologie sonannter okkultur Phanomene, 1902, 宇野、岩堀、山本訳『心霊現象の心理と病理』法政大学出版局、1982年
- 8) 前掲書7) 邦訳書 157頁、出典はユング著、高橋訳『人生の午後三時——無意識の心理学』新潮社、1955年
- 9) ユング著、ヤッフエ編、河合、藤縄、井出訳『ユング自伝 I』みすず書房、1972年、160頁

- 10) 前掲書7) 邦訳書 157頁, 出典は Gesammelte Werke, Bd. 7 (全集第7巻)
- 11) 同書 157頁
- 12) 同書 158頁
- 13) 前掲書7) 邦訳書 117-8頁
- 14) 丸山圭三郎編『ソシュール小辞典』大修館書店, 1985年, 40-2頁, 原文は CFS 21所収
- 15) Recueil des Publication scientifique de F.de Saussure, 1922(Genève-Paris, Slatkine Reprints, 1984) p. 604-5 にその要旨が載っている。
- 16) 富森伸夫「もうひとりのソシュール<未刊資料から>」『言語』vol. 7, No. 3, 1978年, 35頁
- 17) 『現代思想』vol. 8, No. 12, 1980年, 110頁, 出典は CLG/E 3320. 4 : N 15